

## お酒(アルコール)の話 . . . . (その7)

七沢リハビリテーション病院脳血管センター

高橋邦丕

ADHD のアルファベット文字が、そのまま日本のマスコミにも時々登場するようになってきた。ADHD は日本語では注意欠陥・多動性障害と翻訳されている。

以前から、ADHD の発生頻度は高くはなかったが、医療や教育の現場関係者の間では小児期に問題となる先天性障害としてよく知られていた。注意が集中できず、いつも落ち着きがなく、多動で衝動的に動き、自分の行動をコントロールできない、そのような病態を示す問題児は我々の子供の頃にも確かにいることはいた。しかしその頻度はそれほど高くはなかった。それが近年世界的に急増している。

本題に入る前に ADHD に密接に関連した歴史的にも有名な、そしてかつ極めて重要な医学的症候群について説明しておこう。それは胎児性アルコール症候群(FAS)で、アルコール摂取によって引き起こされてくる新生児の奇形を主徴とする症候群である。

先ずはその歴史を振り返ってみよう。1660 年にオランダで健胃・利尿・解熱の目的で作られた薬用酒は、ジュニパーベリー(柏楨の実)で香りをつけたため(フランス語でジュニエールと命名し販売)、薬用酒にも拘らずフランス語の響きが良い上に香りも良く美味しかった。そのため酒飲みの中で評判となり一般にも広く飲まれるようになった。発売から 29 年後、オランダ人のウイレム III 世がイギリス国王となった際、ジュニエールもオランダからイギリスに渡り爆発的な人気を博した。酒の名前もイギリス流に短くジンの愛称で呼ばれるようになった。この 17 世紀末から 18 世紀にかけてのジンの大流行が、当時悲劇的な社会問題を引き起こしたのである。つまり当初は薬用酒として売り出されたため、ジンを飲んだ女性も少なくなかった。そして、ジンを飲んだ女性から生まれた子に奇形が頻発したのである。知能低下・発育不全と共に、顔面・手指・心臓などに奇形が認められた。これが現在胎児性アルコール症候群と呼ばれる病態である。

当時の医学のレベルでもすぐにアルコールが原因であることがつきとめられ、理性的な禁酒運動が女性達の間を広まった。その結果、胎児性アルコール症候群はたちまち激減したのである。その後、この症候群は極めて稀になり、19 世紀から 20 世紀にかけては臨床医の注意を引くことはほとんど無くなった。

しかし、1968 年頃より世界的に広まった快楽主義の波の中、女性が男性と同等の権利を主張するウーマンリブ運動が起こってきた。一部の女性たちはその手始めに、男性と同様に酒を飲みタバコを喫い始めたのである。その結果、300 年前のジンの大流行の時と同様に胎児性アルコール症候群が再び表舞台に顔を出してきたのである。

今日では、アメリカをはじめ西欧諸国では妊娠した場合(妊娠の可能性のある場合)、1 滴の飲酒も行なわないよう保健省から警告が発せられている。酒造会社もタバコと同様にその危険性を表示するように義務付けられている。一方日本では、産婦人科医の間では厳格な禁酒が必要ということは理解されているが、一般臨床医の中には少量なら飲酒

OK などという犯罪的な言動もあるらしい。平成 14 年に日本で行なわれた調査で、妊娠した女性が定期的に受ける 4 ヶ月検診の際に、妊婦本人にこの胎児性アルコール症候群についての認識を問い質したところ、その 47% が全く知らなかったという、背筋が凍りつくような結果が出ているのが現実である。

知能低下・顔面・手指・心臓などの奇形、およびその他の障害を伴う完全な形での重度胎児性アルコール症候群は、かつて出生前診断が発達していなかった時代に、先天性学習障害の最大の原因とされたダウン症候群(古くは蒙古症)の 2 倍の頻度で見られるようになってきた。そして今や胎児性アルコール症候群は先天性精神運動発達遅滞の最大の原因になっており、欧米では出生 300 人に 1 人がこれに該当するという。

しかし、現実はもっと深刻である。奇形を主徴とする重度の胎児性アルコール症候群よりも圧倒的に多いのは、行動異常、理解力や計算能力の低下、不安などを伴う、多様な脳の部分障害を持つ子供達、つまり、冒頭で触れた今回の主題となる身体の多動を伴う、注意欠陥・多動性障害(ADHD)の子供達である。

従来、先天性の遺伝子異常も疑われた小児脳の発育障害(ADHD)は、最近の研究でアルコールに起因することが明らかにされた。しかもそれは極めて少量の飲酒で発生するという。アルコールやアルデヒドのような細胞毒は、成人では癌を引き起こすが、体形成途上の胎児の器官にはさらに深刻な影響を与える。受精から出産までの全期間、急速に細胞分裂を繰り返し成長する胎児にとってアルコールは猛毒である。とくに女性は胃中にアルコール脱水素酵素が少ないため、アルコール分解能が悪く、胎児への影響は想像を絶するものとなる。子供たちの学習障害の大部分を占める ADHD は、胎児性アルコール症候群の軽微な発現型であり、その発症には少量のアルコールで十分である。ADHD は以前考えられていたような先天的な遺伝子異常によるものではなく、少量のアルコール摂取によって引き起こされてくるものであり、理性を持って禁酒すれば 100% その発症を防げるのである。コルンフーバー教授のドイツでの調査によると、第二次世界大戦後から 60 年代までとそれ以降とを比較すると、驚いたことにその頻度は 10 倍以上に増加しており、その後も増え続けているという。そして現場の教師や家族を絶望的な状況に陥れているという。日本ではまだ確かな調査はされていないが、教育の現場では既に欧米と同様の問題を抱えており、マスコミにも登場するようになってきている。

子に対する母親の愛情は世界中どこの国の母親も同じく、愛情の最たるものである。その母親が自分の最愛の子、それも無抵抗のか弱い胎児を猛毒のアルコールに晒し、取り返しのつかない障害をその子の生涯にわたって背負わせてしまうのである。

若い女性が平気で酒を飲む現代の日本の社会は病的である。かつて日本女性は知的で優しく慎ましやかで理想的な妻となり母親となると思われていた時代があった。それは既に遙か遠い昔のように感じられる。愚かしい表情でビールやワインを飲む現代の若い日本人女性を見ると、紫式部や清少納言、樋口一葉や岡田滋子ら才媛の末裔はどこへ行ってしまったのか、と嘆きたくなるのは私だけであろうか。